

-zbb 2002 photo : Yohta Kataoka*

nest

2-24-4-301 Jingumae Shibuya-ku Tokyo 150-0001

phone / facsimile : (81 3) 34 08 42 22

web site : <http://www.nesTV.com>

e-mail : info@nesTV.com



performannce "Circulation Module"





performannce *"Circulation Module"*



"Circulation Module"

2001 12-13 Oct. at KIASMA theater / Helsinki
(invited to festival "ARS 01")

2000 18-21 Mar. at MUFFATHALLE / Munich
(invited to festival "DANCE 2000")

1998 15-17 Jan. at PARK TOWER HALL / Tokyo
(invited to NEXT DANCE FESTIVAL '97)

photo : performance at MUFFATHALLE / Munich
by Yohta Kataoka





performannce "SINE WAVE FILTER"

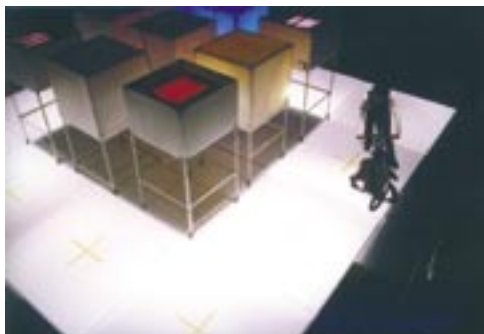
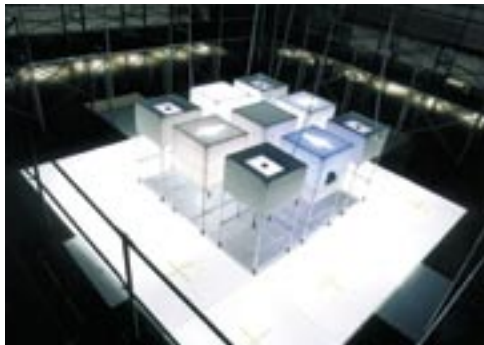


photo : premiere at LAFORET MUSEUM ROPPONGI / Tokyo
1999. 21-22. MARCH
by Yohta Kataoka

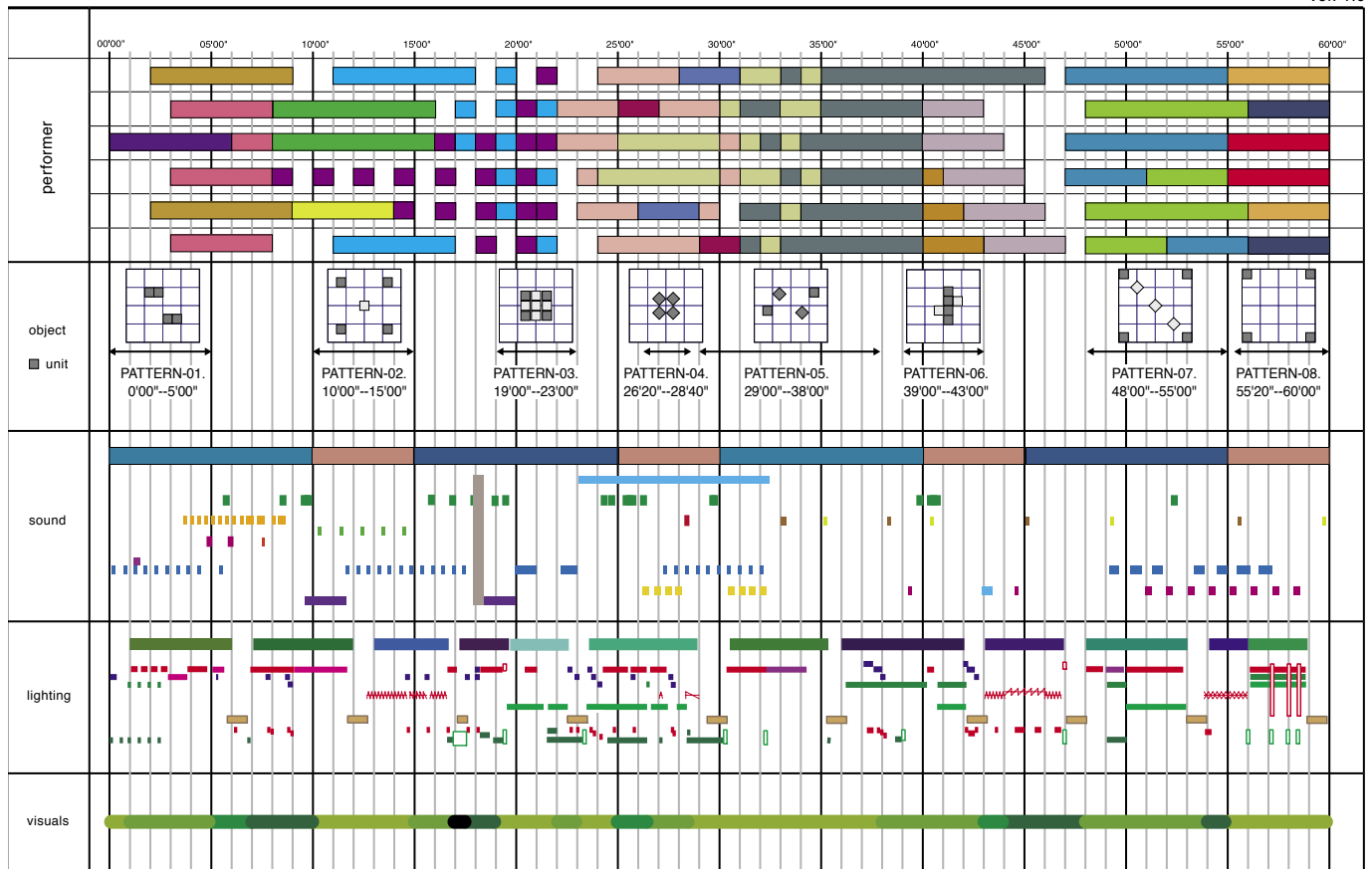




performannce "SINE WAVE FILTER"

SCORE for "SINE WAVE FILTER"

Ver. 1.0





outline



nest はインスタレーション、サウンド、ビジュアル、身体動き等を取り込みながら、様々なメディアを横断した作品を作り続けてきている。

基幹メンバーはディレクター、ミュージシャン、建築家、映像作家、コンピュータ・プログラマー、パフォーマーなどと多岐にわたっている。

そのネットワークそのものが nest だとも言えるだろう。



ステージワークを中心とした作品は、カテゴリーにとらわれない自由な発想で、様々なクリエイター同士のディスカッションに基づいて作られており、最近では情報流や表現のシステムそのものに目が向けられている。

またテクノロジーの発展とコミュニケーションの関係も考え続けられているテーマである。



nest の活動は常に「対話」であり、様々な形のコラボレーションを続けている。





biography (1997-1999)

Jan. 1997 "Syntax Error" 発表
(於：BALLROOM Daikanyama)



コミュニケーションにおけるズレを様々な形で提示。
ステージ上には天井まで上下する四本のトラスバーがあり、その中をパフォーマーは駆け抜けた。

構成 - 石山雄三 音楽 - 江村桂吾
美術 - 福田玲子、濱中直樹 映像 - 西本太郎
照明 - 関口祐二

Jan. 1998 "Circulation Module" 発表
NEXT DANCE FESTIVAL 97 招待参加
(於：PARK TOWER HALL)



現代の情報流通システムにフォーカスを定めた作品。
クラブシーンやテクノシーンからのクリエイターも参加した。インターネットによる同時中継も行う。

また現在も開発が進められているクリエイション・メソッド "c.m. process" の導入が試みられた。

原案 - 石山雄三 音楽 - MOODMAN、MULTIPLEX
美術 - 濱中直樹 映像 - 西本太郎 照明 - 関口祐二
ネットワークテクノロジー - 大島啓介

Mar. 1999 "SINE WAVE FILTER" 発表
21世紀アートシリーズ招待参加
(於：Laforet Museum 六本木)



この作品は「ステージ(ライブパフォーマンス)」でどこまでできるのかという試みから出発した。

サウンドもライティングも映像も、そしてもちろんパフォーマンスの動きも同時に作り始められ、全てのスタッフはたった一つの共通言語であるタイムクリックを聴きながら(見ながら) 作品を進行させた。

キーワードは「コミュニケーション」そして「共存」。

構想 - 石山雄三 音楽 - nest (松尾邦彦)+ 夏目陽一郎
リミックス - MOODMAN 美術 - 濱中直樹
映像 - 西本太郎 照明 - 関口祐二





biography (2000-2000)

Mar. 2000 ワークショップ
"Conversation Program" 開催
(於：特設会場 / リンカーン)



リンカーンのオーガニゼーション「The Wagon Train Project」による招聘により実現。

参加者はダンサーのみならず、デザイナーや映像関係のクリエイターの人達にも及び、年齢層も10代から60代までと幅広かった。

また「非常にユニークな構成だ」、「広く一般の人達も参加できるプログラムに好感を持った」等の意見が多かった。

Mar. 2000 "Circulation Module" ミュンヘン公演
フェスティバル "dance2000" 招待参加
(於：Muffathalle / ミュンヘン)



隔年で開催される有名なダンスフェスティバル「dance」(プログラム・ディレクター - ガブリエル・ナウマン) による招聘公演。 四日間の公演全てソールドアウト。

「この作品はブラック・マウンテン・カレッジで行われた伝説的な公演の現代版と言えるだろう。

照明もDJもビデオアーティストもドラマーもダンサーと同様に「パフォーマー」として同等に扱われているのだ。」

-----Peter M. Boenisch (大学教授 / 現代文化論)

「Sueddeutsche Zeitung」(2000年3月21日)

Jul. 2000 "LinkAge" 発表
"Julidans" フェスティバル招待参加
(於：Paradiso / アムステルダム)



オランダのダンスカンパニー「ダンスグループ・クリスティーナ・ドウ・シャテル」との共同制作作品。

アムステルダムにて6週間にも及ぶクリエイションを行う。

「この傑出した公演は、結果的に時代の精神を厳格に指し示している」

-----NRC HANDELSBLAD (オランダ全国紙)

この後、欧州ツアーを経て、同年10月には国際交流基金フォーラムにて東京公演も行う。





biography (2001-2001)

Jul. 2001 リサーチプログラム
 "Cellbytes 2001" 招待参加
 (於: Middlesex 大学 / ロンドン)



現地に3週間ほど滞在し、10数名のアーティストとともにテクノロジーと身体表現との関係性について議論し、小作品を製作。

インターネットでのストリーミングの実験も行う。

Oct. 2001 "Circulation Module" ヘルシンキ公演
 フェスティバル "ARS 01" 招待参加
 (於: KIASMA / ヘルシンキ)



フィンランドのコンテンポラリー・アートセンター「KIASMA」での招聘公演。

シアター関係者のみならず、メディアアート方面からの評価が高かった。

Oct. 2001 レクチャー / デモンストレーション開催
 (於: KunstWrke / ベルリン)



急遽決定したにもかかわらず、会場にはドイツを中心としたキュレーター、アートディレクター等が多数駆けつけた。

ビデオやパフォーマーのデモンストレーションを交えて、パフォーマンスの可能性について、参加者とディスカッションした。





biography (2002-2003)

Mar. 2002 "LinkAge" ウェリントン公演
 "ニューージーランド・フェスティバル" 招待参加
 (於: SHED 6 / ウェリントン)



「LinkAge のエネルギーは正に我々の時代の力なのだ。」
 -----SUNDAY STAR TIMES (NZ 全国紙)

「ライティングやサウンドなど全てが溶け合って作品を
 している。」

-----THE DOMINION (NZ 全国紙)

Aug. 2002 "zbb" 発表
 フェスティバル"JADE2002" 招待参加
 (於: WOMB)



プロジェクト参加クリエイター全員が「断片」を持ち
 寄り、それをリミックスして再構成、作品化するという方
 法を採用し、その混然となった状態から、新たなリアリ
 ティを模索した。

タイトルの [zbb] は、ソフトウェア開発時に、製品化さ
 れる一歩手前の段階を指す "zero bug bounce" が基になっ
 ている。

Mar. 2003 インスタレーション
 "[coded:decoded]" 発表
 (於: foo、ドイツ文化センター、スパイラル他)



nest 初の本格的なインスタレーション作品。

特にインタラクティビティを追求し、各種センサーから
 得た人やモノの出入りの情報が処理されて、3,000 個を超
 える青色 LED を中心とした各種デバイスに反映された。

現在もプロジェクトはバージョンアップを続けている。





reviews

○彼らが生みだそうするのは、(中略)「現在と呼吸する音」だろう。

宮沢章夫(劇作家 岸田戯曲賞受賞作家)「鳩よ!」(1993年12月号)

○NESTはまさしく、表現というものの王道を歩んでいることになる。

宮城聡(演出家)「ダンスマガジン」(1994年3月号)

○石山は二十四歳だが、その年代の尖端がもつ美学が隠された言語として読みとることができる。

長谷川六(舞踊評論家)「毎日新聞」(1994年9月29日夕刊)

○いずれダンスを置き去りにして、メディア・パフォーマンスの理論化と身体論を詰めてゆく者達である。

國吉和子(舞踊評論家)「シアターアーツ」(1994年創刊号)

○このほど上演された新作「UT」でも、まず圧倒されたのはその情報だ。(中略)いまでは陳腐な響きすらある“マルチメディア・アート”という言葉の本質を見るようだ。

「日本経済新聞」1995年8月6日

NESTのパフォーマンスはコンピューターなしには考えられないのだが、ほかのインターメディア・パフォーマンスとは異なる独自の構想を持っている。

國吉和子(舞踊評論家)「アサヒグラフ」(1997年2月14日号)

終演後、黒髪率が異様に低い観客たちのあいだで、口々に「きもちよかった」「おもしろかったぁ」と語り合うのを耳にした。最近、こんな光景はめったにない。

新川貴詩(美術評論家)「美術手帳」(1997年3月号)

「どこにたどり着き、何になるのか?」という期待や想像力を残してくれたこの作品は、きっと21世紀に寄せる想いと似ているのかもしれない。

「shift」(ウェブマガジン)(1999年4月)

明日をより強く感じさせてくれたこの集団が、東京という街に生まれ根づいていることを、僕たちはすでに幸福に思うべきだ。

藤井慎太郎(美術評論家)「骰子(DICE)」(1999年第28号)

この作品はブラック・マウンテン・カレッジで行われた伝説的な公演の現代版と言えるだろう。

Peter M. Boenisch(大学教授/現代文化論)「Süddeutsche Zeitung」(2000年3月21日)





review

"Süddeutsche Zeitung" (南ドイツ新聞) (Mar. 21 2000)

by Peter M. Boenisch

Donnerstag, 21. März 2000 MÜNCHEN

Dance: Nest

Globaler Dorfanz

Denn aus dem Land, das uns Sony und Ken Kesey bringt, nicht mit konventionellem Tanztheater zu rechnen ist, war seit Dumb Type längst zu vermuten. Dance 2000 hätte nun mit Nest eine weitere Gruppe von Tokio Multimedia-Szene erstmals nach Europa. Seit 1999 setzt dieses Kollektiv im Kino intensive elektronische High-Tech-Performances auf die Bühne, auch das in der Muffathalle genutzte „Circulation Module“ ist totales Techno-Theater für die Internet-Generation. Als Beitrag für dieses Festival nur konsequent in einer Zeit, in der längst nicht mehr (nur) auf der Theaterbühne, sondern vor allem im Club gefeiert wird.

So beschaffen DJs die Halle schon mit pompösem House, als die Besucher auf der Galerie hinaustragen, von der sie - von oben und von allen Seiten - das Geschehen betrachten. Kaum merklich beginnt auf den Monitoren die Zeit zu laufen. Genau 90 Minuten dauert dieses multimediale Körperstechniktheater, marktstrukturiert in einer minimalistischen Partitur, die unter dem Publikum ausgelegt wird. „Circulation Module“ musiziert dabei wie eine updatete Version der legendären Unterwasser- am Black Mountain College an Lichtdesigner, DJ, Videokünstler und Schlagwerker sind sieben sechs Tänzern gleichberechtigte Performer. Wo aber Cuntchingans & Consorten Athletikaktionen auf der Bühne ausstellen, reißt Nest diese Grenzen nieder: Die Bühne ist der Club, ist der Alltag.

Wie auf dem Fastebord des Computers führen die Tänzer in weißen Dornen Alltagsbewegungen aus, ein kurzes Winken hier, das paroxysmische Öffnen eines Fensters dort, negative Armbewegungen, choreografiertes Springen und Fallen. Gleichsam auf Knopfdruck folgt dann gleich dem „Ausblenden & Einblenden“-Prinzip der Computerprogramme die nächste Aktion. Den gleichen kollaborativen Schritt-Prinzipien gehorchen auch Soundtrack und Rückprojektionen. Die Körper der Akteure sind nicht mehr Hauptache, sondern Medien wie Musik und Video. Sie vereinen Fakt und Fiktion in synthetisierten Zwischenwelten, Computergrafiken und Sprachmustern, Videoprojektoren und Technoshow.

Auch der konkrete Alltag der Aufführung ist keine andere, dem Geschehen ausblühende Ebene mehr. In die Projektionen sind menschenbildende Strukturen eingebettet. Die Tänzer agieren vor ihrer eigenen Überdimensionen: Projections, die Zuschauer sehen auf den Leinwänden die Performer beim Umsetzen in der Gedröhre - und sich selbst beim Zuschauen. Das Publikum ist in diesem „Circulation Module“ verschaltet. 180 Beats pro Minute und der permanente optische Reizeffekt klickt Nerven und Muskeln an.

Gründe in der Zusammenarbeit mit dem anderen Festivalbeiträger erwies sich diese Performance als Manifest der Weltkultur 2000: keine interkulturellen Konfrontationen, keine Exotik, sondern elektronische Lebens- und Erlebenswelten. Das Globale Dorf ist längst Realität in dem Klub von New York, Tokio und München. PETER M. BOENISCH

・日本語訳(要約)

Dumb Type を観てから、SONY やケンイシイの国は伝統的なダンスシアターばかりではないということ、我々は理解するようになってきている。

フェスティバル「dance」は、東京のマルチメディア・シーンから nest という新たなグループを招聘したのだ。しかもヨーロッパ初演である。

1990 年から活動している、石山雄三を中心とするこの集団は、ハイテクなパフォーマンス「Circulation Module」を Muffathalle で上演した。これはまさにインターネット世代に向けたトータル・テクノ・シアターだった。

この作品はブラック・マウンテン・カレッジで行われた伝説的な公演の現代版と言えるだろう。照明も DJ もビデオアーティストもドラマーもダンサーと同様に「パフォーマー」として同等に扱われているのだ。

マース・カニングハム・カンパニーは「日常」をステージで展開したものだだったが、nest もまた然り。彼らは境界線を打ち破っている。ステージはクラブであり、また「日常」なのだ。

コンピュータの画の出来事のように、ダンサーは白い衣装に身を包んで、日常的な動きを繰り返す。体を揺らしてみたり、窓を開ける時にするような動きを繰り返している。これはコンピュータで言うところの「カット&ペースト」を展開しているといえるだろう。音楽も映像も同様なのだ。これらのメディアは、コンピュータ・グラフィックとストリート・シーンが共存し、鳥がさえずりテクノビートがあふれている、といった我々のこの統合的な世界と(現実的にも仮想的にも)密接な関係を結んでいる。

この作品は 2000 年における世界文化の宣言であったということが分かるだろう。それはすなわち文化間の対峙もなく、エキゾチズムもなく、ただあるのは電子的に増幅された「体験」という名の世界があるだけなのだ、というものだ。

グローバル・ビレッジはすでに現実のものとなっている - ニューヨーク、東京、そしてミュンヘンで。





review

"DICE" (magazine for independent culture / No.28 1999)

by Shintaro Fujii

最近、感覚的な総合に頼った作品ばかりが目(そして鼻)につくこの街で、nestを際立たせているのは、僕たちの経験を成り立たせる「場」についての重層的な問い、その真剣さと強度だ。新作「SINE WAVE FILTER」は、フランス語の(sens)の多様な意味——方向、意味、感覚——をめぐって構築されているといってもよい。そこには、分析と総合という二つのベクトル、要素と全体の間の往復運動を確実に感じさせてくれる思考と実践の力がある。

それは、舞台と客席が正面から向き合う劇場空間とは明確に異質な、正方形の分割を基調とした幾何学的空間にまず表れている。格子状に16分割された正方形の床面を、工事現場の足場のような客席が二層をなして囲む。そこから見下ろすパフォーマンスの空間は高さを失い、チェス盤かパズルを思わせるゲームの平面へと変容させられる。その格好の隠喩をなす4台の上を向いたモニターと箱のオブジェ、さらに人間の身体が、胸かパズルの一片のように、閃光と重低音が降りそそぐなか、格子平面上の移動と運動を繰り返す(矢印、正方形、人間などの光のシンボ

ル、モニター映像もまた平面上を滑っては、移動とずれを強調する)。下降する観客の視線、縦横を強調する格子平面といったこれらの異質な方向性が、意味の枠組みを規定してきた旧来の約束事を離れた、新しい「演劇=劇場(theatre)」空間の可能性を問うている。

——nest代表である石山さんに、作品づくりのプロセスについて伺いたいのですが。

石山:演劇やダンスといった、すでにルーティン化されたつくり方はしたくないんです。建築家がフライヤーのデザインをしたりとか、僕らは自分以外のことにも自由に手を出し口も出す。僕らは基本的に遊び仲間。そこでは僕は代表といっても核家族の親父みたいなもんです。父親だけれどなんの権威もない(笑)。今回は、みんなが共有する基盤として、最初に60分という時間を設定しました。僕らは枠組みを決めてから掘り下げていくことが多いんです。また、みんなそれぞれが動かせる単位(照明ならグリッド、パフォーマンスなら身体、映像ならモニター)を持っているということも強く意識しましたね。

作品づくりでは、「ほころびのコミュニケーション」が成立するような、間かれたシステムをどうしたら作り出せるか、ということもいつも考えています。どうしたら、不完全な存在である「僕」たちが他者と共存し、そのほころびを縫い合わせる事ができるか。結局ハイデガーのいう「世界内存在」だと思っんですよ。僕は世界に動かされているけれど、僕は世界を動かしているんだ、という。

——プログラムにしたがって、厳密かつ正確に運動する空間の中で、どうしても機械にはなり得ない身体はどのような位置を占めることができるのですか。

石山:アカデミックな意味でのダンスや演劇は全く目指してないんです。ただ、演劇的でもダンス的でもない「身体」のテクニクや訓練をどう考えるかについては、正直なところ僕自身まだよく分からないところがあります。今回のような正面も表も裏もない空間で、どうすれば観客を交えて、ほころびの回路がつながって、電流が通るようになるのか、そこで試行錯誤しているところはある。そこをおもしろがってもらえるかどうか。コンピュ

ータにもどうしてもバグはあるし、逆にエラーがあるから僕らはそれをおもしろいと思うように。

入口で手渡された紙片には、0秒から60分に至る、ランダム関数が決定した運動と変化のダイアグラムが書き込まれている。全てが前もって、正確に無駄なく計算されているのだが、重低音の効いたテクノ音とストロボの閃光が際限なく反復し生み出す昂揚によって、明白なはずの知覚と感覚は痺れ、歪み、ずらされていく。それは、ケージとカニングハムが夢見た偶然性のユートピア、ベケットの可能性の消尽の実験を、現在において正統に引き受けようとするものだといいていい。問題意識をより複雑かつ明晰に提示するために、戦略を洗練させる必要は残るとしても、今夜の凝縮された瞬間瞬間のなかに、明日をより強く感じさせてくれたこの集団が、東京という街に生まれ根づいていることを、僕たちはすでに幸運に思うべきだ。

nest 「SINE WAVE FILTER」: 3月21日、22日
ラフォーレミュージアム六本木にて行われた
写真: 片岡隆太

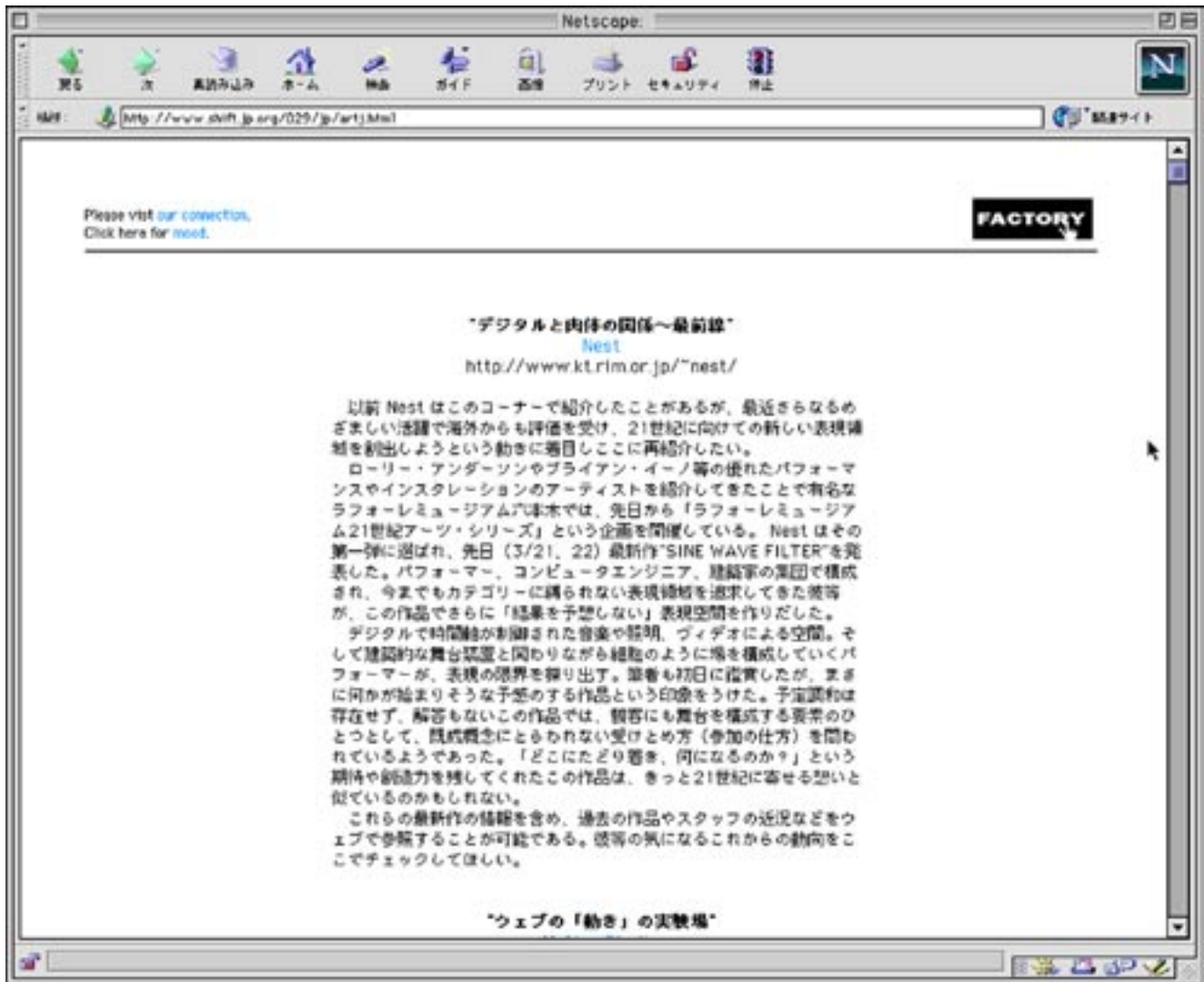




review

"shift" (Web magazine for contemporary culture / Apr. 1999)

by Shinya Chiba





review

"Weekly Asahi Graph" (Feb. 14, 1997)

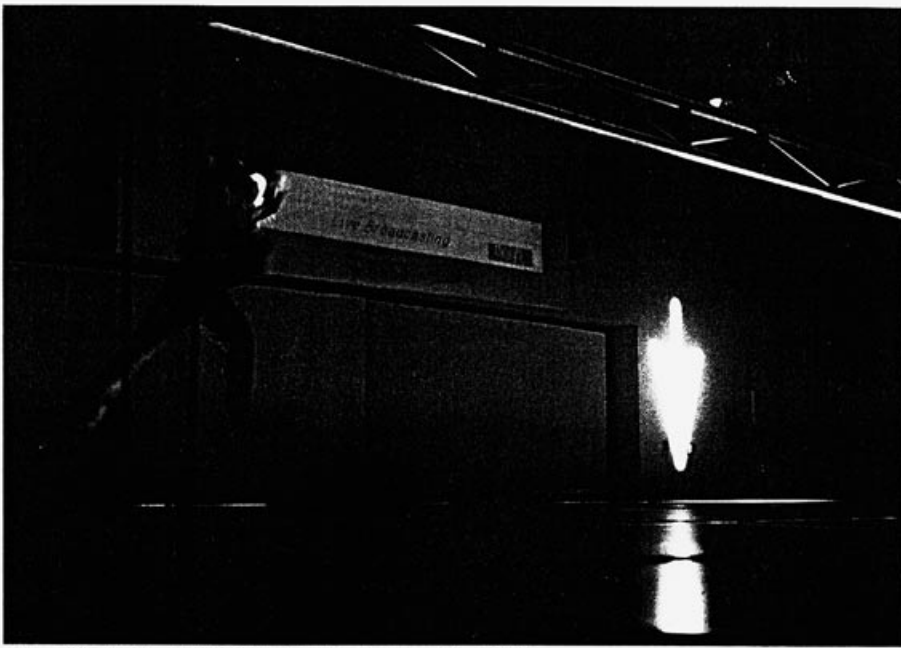
by Kazuko Kuniyoshi (dance critic)

Dance

「Syntax Error」

コンピュータを使い、スペースを異常なパワーで満たすネストの新作

文●國吉和子 text by Kazuko Kuniyoshi



スペース全体を放電ボックスに変容させてしまうネストの舞台。撮り＝六瀬達郎

ネストの公演は一年半ぶり。中央に高く舞台を設定、三方から舞台を取り囲むような客席はパイプで組まれた立ち見席。一方の壁とそれに対する向かい側の壁の二面にコンピュータ

の公演は一年半ぶり。中央に高く舞台を設定、三方から舞台を取り囲むような客席はパイプで組まれた立ち見席。一方の壁とそれに対する向かい側の壁の二面にコンピュータ

の公演は一年半ぶり。中央に高く舞台を設定、三方から舞台を取り囲むような客席はパイプで組まれた立ち見席。一方の壁とそれに対する向かい側の壁の二面にコンピュータ

の公演は一年半ぶり。中央に高く舞台を設定、三方から舞台を取り囲むような客席はパイプで組まれた立ち見席。一方の壁とそれに対する向かい側の壁の二面にコンピュータ

の公演は一年半ぶり。中央に高く舞台を設定、三方から舞台を取り囲むような客席はパイプで組まれた立ち見席。一方の壁とそれに対する向かい側の壁の二面にコンピュータ

の公演は一年半ぶり。中央に高く舞台を設定、三方から舞台を取り囲むような客席はパイプで組まれた立ち見席。一方の壁とそれに対する向かい側の壁の二面にコンピュータ

の公演は一年半ぶり。中央に高く舞台を設定、三方から舞台を取り囲むような客席はパイプで組まれた立ち見席。一方の壁とそれに対する向かい側の壁の二面にコンピュータ

の公演は一年半ぶり。中央に高く舞台を設定、三方から舞台を取り囲むような客席はパイプで組まれた立ち見席。一方の壁とそれに対する向かい側の壁の二面にコンピュータ





performance "zbb"



photo : premiere at WOMB / Tokyo
2002. 13-15. AUGUST
by Yohta Kataoka





installation "[coded : decoded]"



photo : premiere at foo / Tokyo
2003. 17-10. MARCH
by Yuzo Ishiyama

